

## 巻頭言

# からだの内側への着目

片岡 康子

ある保育園でのある日、子どもの描いた絵を一人の画家に見てもらったことがきっかけで、その「実験」は始まった。

画家は並べられた絵を丁寧に見終わると「どの絵にも子どものところが素直に表現されていない、子どもが縮こまっている。保育が大人の管理になっていないか」と保母たちにとってシヨツキ

ングな酷評をする。いったい、あたしたちはなにをしてきたんだろう…と、茫然としている保母たちに、画家は一つのヒントを出す。園内には「子どもたちがぎつとおもしろがるだろう」という大人たちの想定で用意したいろいろな遊び道具がいっぱいある。その遊び道具が子どもを縛っているんじゃないか。何もないところへ子どもを放り

出してみたらどうだろう……という、保母たちの常識を揺さぶる提案だった。

さて、半年後。苦言を呈した画家を再び招いて子どもの絵をみてもらう。絵の具をぶちまけたように塗りたくったそれらの絵は、半年前の細い線だけの貧弱な絵を描いていた子どもの絵とは思えない、迫力溢れるものになっていった。

この話は、ジャーナリストの齊藤茂男さんのドキュメンタリーテレビ番組のレポートから得た情報である（註）。

さて、何もない園庭ではいったいどのような子どもの遊びが展開されたのか。

答えは……、そうです、その通り。われわれの子ども頃とまったく同じなのです。

がらんとした園内で子どもは初めのうち戸惑っている。だがしばらくすると自分たちだけで、勝手に園庭に飛び出す。土いじり、ドロいじりで衣

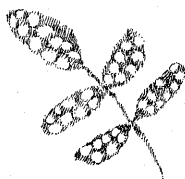
服はたちまち真っ黒になる。そのうちに裸になって、互いにドロを塗りたくって取っ組み合いをしたり、ドロ団子をぶつけあったりする。木登りする子がいる。あちこちでけんかが始まる。保母は仲裁しないことになってるので、けんかは延々と続くが、そのうちに仲直りしてまた一緒に走り回ったりしている。

心底おもしろくてたまらないという顔で遊びに熱中する子どもたちのびっくりするような情景を、カメラマンは密着して撮りまくっていたという。

なぜ、子どもたちの絵は生き返ったのか。

その答えはあるベテラン教師が語った次の言葉の中にある。

「荒れている子どもを見てください、長馬とびとか





押しくらはまんじゅうとか、からだをぶつけ合い肌

に触れ合って、思う存分遊んだという経験がないので、体の内面に、もつと子どもをやらしてくれ!、と叫んでいる命の塊みたいなものがあって、暴れたり大声で叫んだりしないと、その内なるものが納得しないんじゃないかと思えるんですよ」

対象のすべては、生きているからだの中に投げ込まれ、生き返り、鳴り響き、からだと交響する。人は宇宙の背後に数学的な法則を発見して驚くが、神秘はまったく同じようにからだにも潜んでいるという事実を忘れていたのではないだろうか。

先日、わたくしの企画したシンポジウムに出演家の鴻上尚史さんに来ていただいた。その折り、「声とからだで遊ぼう」というテーマで展開された『課外授業ようこそ先輩』(NHK放送)の話

をビデオで紹介された。

そして、からだの内側に着目することを喚起された。

運動には二つの方向がある。一つは、からだの外側を意識していく方向。もう一つの方向はからだの内側を意識していく方向。忘れがちなのは内側を意識することであるという指摘であった。

鴻上さんは、からだの内側を意識させながら、自分をさらけだして、子どもたちにつつかっていく。「あなたは声をもっているわけだし、からだをもっているわけだから、それを使うことは楽しいことだよ」

「おもしろかったかい!」

「嘘つけ、そんなもんじゃないだろう」

「どうしたらおもしろくなるかな?」

鴻上さんの子どもたちとのやりとりは、「まず教師自身が楽しむこと、そして子どもと一緒に

おもしろがりやってみること」が基本であること  
を教えてくれる。

最近、「子どもたちは意外に疲れている」とい  
う声をよく耳にする。

子どもたちはリラックスできない。からだの力  
を抜けない。

そんな時は、まず呼吸をゆっくり吐き出すこと  
から始めると良い。子どもたちは、吸うことはで  
きても深く吐き出すことができない。いや深く吸  
うこともできない。ある先生は、泳げない子ども  
は息を吐き出せないと言っていた。ダンスでも息  
を吐き出すことから始める。息を吐ききれば、か  
らだは自然に息を吸い始める。からだの力が抜け  
てくる。

息を吐き出して無防備になって、自分のからだ  
の内側に着目してみる。すると凝っている肩、ね

じれた背骨、反った腰に気づき、心臓の鼓動、呼  
吸する音も聞こえてくる。

そんなからだを忘れていく。

子どもの生きたからだを忘れていく。

教師自身のからだも忘れていく。

与えることだけを考え、与えたことができない  
からと叱り、思うような枠にはまらないことを嘆  
いたりしてはいないだろうか。からだの外側だけ  
を意識してはいないだろうか。

子どもたちがからだの内側に気づき、生きて感  
じている何かを表現できる手立ての基本は、勝手  
に、自由に、遊ばせること。思いつきり話を聞い  
てあげること。そしてからだとかからだの触れあい  
をすることであろう。

そんな基本を忘れずに、子どもたちが自分をさ  
らけだし、自分を愛し、自分に自信が持てるよう  
にする場を開いてあげたい。

幼稚園長になって三年の月日が過ぎた。

卒園式後のお別れ会でのこと。本当に園とはお別れという最後の時がやってくると、毎年、園児たちの多くがこらえ切れずに涙を流す。しゃくりあげる子もいる。今年初めて、それは感傷と言つては済まされないことに気が付いた。

子どもたちのからだの内部に、お山も、木も、お砂場も、そして先生も、お友だちも、入り込んでいたのだ。園はまさにからだの一部であり、園という時空間から離れることは身を削られることなのだ。子どもたちは幼稚園という場に自分のまごとのからだを存在させて生きていたのだ。

現代っ子の生活から消失した「遊ぶ時間、遊ぶ空間、遊ぶ仲間」を存分に楽しみ、生の欲求を存分にぶつけたのである。こらえ切れずに涙し、しゃくりあげる姿は、精一杯遊びきって満足した喜びがあつたのだ。

保育とは、宇宙のような神秘をもつ子どもの内側に目を向けること。そして内側と外側の合体、すなわち「生きること」と「表現すること」がからだを接点にして実現するように、今の子どもたちを無意識に束縛しているものを解きほぐし、崩し、壊し、命の塊を納得させることのようにである。

卒園する園児たちの歌声は声とからだで伝える育ちの証し（表現）であり、一人ひとりがからだの奥底から発する声は心をあわせたハーモニーとなつて会場に響き渡つた。

（お茶の水女子大学）

註 齊藤茂男、一九九八、「描線が物語る心の危機」、

『こどもと体育』、光文書院、一〇六号